

# 性役割特性語の分類にみる性役割期待の変化

吉岡真梨子<sup>1</sup>・井上 弥  
(2017年12月22日 受理)

The changes in the gender-role expectations through the classification of gender related traits

Mariko YOSHIOKA and Wataru INOUE

**Abstract:** The purpose of this study was to examine the changes in the gender-role expectations through the classification of gender related traits. The gender-role expectations of university students in recent times were investigated using items of the M-H-F scale (Ito, 1978) which composed of gender related traits. Sixty-eight university students, 37 males and 31 females, were participated in this study. Participants asked to answer the M-H-F scale of self-concept, desirability for males and females, and Communion-Agency Scale (Dohi & Hirokawa, 2004). The main results were as follows: (1) Factor analysis on scores of gender importance for males or females showed the male role factor and the female role factor. However, some female role factor traits in this study included traits which were classified as masculinity traits in Ito (1978). (2) There were significant correlation with corresponding CAS factors. (3) The female role factor scores were higher than the male role factor scores in both males and females. These results suggested that female role expectations is changing.

**Key words:** gender related trait, gender-role expectations, masculinity, femininity

**キーワード:** 性役割特性語, 性役割期待, 男性性, 女性性

## 問題と目的

「男性は仕事、女性は家庭」という伝統的な性役割観は、近代以降、日本において根強く支持されてきた価値観である。このような伝統的な性役割観はさまざまな形をとり、われわれに影響を及ぼしている。柏木（1967）が、人は自分の性に応じた行動、態度をとることを、潜在的にまた、顕在的に期待されていると述べているように、日常生活において、誰もが「女らしさ」や「男らしさ」という、周囲からの性役割期待を感じた経験があるだろう。他方で、近年、女性の社会進出や男性の育児参加、ダイバーシティ化の推進などが、一般に広く知られるようになってきている。柏木（1967）は、性役割がその社会、時代、文化により、著しく変動するものであることは明らかであるとも述べており、現代日本では今まさに、人々の性役割に対する価値観が大きく変動し、再構築されようとしている可能性が考えられる。

1970年代以降、心理学における性役割の研究では、男性性と女性性是对立した概念ではなく、同時に併せ持つことが可能

---

<sup>1</sup>広島大学大学院教育学研究科博士課程後期

であるというアンドロジニーの概念が Bem (1974, 1976) によって提出され、日本においても伊藤 (1978) によって、同質の調査が行なわれた。伊藤 (1978) は、M-H-F scale を作成し、男性に期待される特性として Masculinity (男性性)、女性に期待される特性として Femininity (女性性)、性別に関わらず男女ともに社会から期待される特性として Humanity (人間性) の 3 次元が、性役割の次元として存在していることを三角形仮説として提唱した。そして、男性役割期待、女性役割期待のいずれにおいても、性別による役割期待の分化が明瞭になされているが、男性にも女性にも Humanity という要素が多く望まれていることを示している。また、男性と女性の役割観は、広義の生育・生活環境に影響されながら、役割という機能にとどまらず、その個人の生き方あるいは価値観と相互に浸透し合っているように思われると考察している。このことから、伝統的な性役割に当てはまるかどうかに着目するだけでは、性役割による影響を十分に検討することはできず、M-H-F scale のように、性別に関わらず男女ともに社会から期待される特性もあわせた、パーソナリティ特性に着目することが必要であるといえる。しかしながら、伊藤 (1978) が考察しているように、男性と女性の役割観は、広義の生育・生活環境に影響を受けるものであるため、社会、時代、文化により、著しく変動しているだろう。したがって、約 40 年前に伊藤 (1978) が作成した M-H-F scale で扱われている性役割特性語は、現代日本で期待されている Masculinity や Femininity, Humanity といった性役割特性と一致していない可能性が高い。

これに対し、後藤・廣岡 (2003) は、M-H-F scale を用いて、作成から約 20 年を経た大学生の性役割に対する認知を検討している。その結果、性役割特性語の認知においては男性性、女性性を弁別する軸と性的なものや非性的なものを弁別する軸がみられた。また、これまで Masculinity とみなされていた「指導力のある」、「自己主張できる」や Femininity とみなされていた「言葉遣いの丁寧な」が Humanity に移行し、Humanity とみなされていた「明るい」、「暖かい」、「率直な」が Femininity に移行するなど、男女の役割が近づき、女性役割は以前よりも社会的に望ましいものと捉えられるようになったことが示唆された。一方で、男性役割期待と社会的評価とのズレが生じ始め、男性役割期待を身につければ自動的に社会的に望ましい性質も身につくというわけにはいなくなってきたことも示唆されている。これらの結果から、約 20 年を経て日本における性役割観が、予測されたように少しずつ変化してきていることが明らかになったといえる。これを踏まえると、後藤・廣岡 (2003) の性役割特性語認知の検討から更に約 15 年経過した 2017 年現在では、より性役割に関する価値観の変容がみられると推測される。

渡邊 (2017) は、男性に期待される性役割の多様化から、新しい男性役割をとらえる尺度の検討が必要であるとし、新しい男性役割尺度の開発を行なっている。その結果、新しい男性役割尺度は「女性への気遣い」、「家庭への参加」、「他者への配慮」、「強さからの解放」の 4 因子により構成された。基準関連妥当性については、M-H-F scale (伊藤, 1978) や共同性・作動性尺度 (CAS: 土肥・廣川, 2004) が用いられており、一定の妥当性が確認されている。これらの結果を踏まえ、男性は特に女性を気遣い、従来女性役割とされてきた家庭役割を担おうとする意識が高まっているが、男性自身が弱さを表出することには抵抗感をもっていることが推察されている。このように渡邊 (2017) の研究では、新しい男性役割には従来の女性役割の一部が含まれつつあると示されており、これは後藤・廣岡 (2003) で確認された性役割の変化がより顕著にみられる可能性を示唆するものである。しかしながら、渡邊 (2017) は、男性役割のみに着目しており、女性役割の変化については明らかでない。また、妥当性検討に用いられた M-H-F scale は伝統的な男性性や女性性を示すものとして扱っているため、M-H-F scale そのものに用いられている性役割特性語の分類が変化している可能性については言及していない。

以上より、本研究では、M-H-F scale で用いられている性役割特性語に着目し、約 40 年を経た 2017 年現在でも同様に Masculinity, Femininity, Humanity という特性に分類されるのか、因子間で尺度項目の大幅な移動がみられるのかについて検討することを目的とする。その際、後藤・廣岡 (2003) において、再分類された Masculinity, Femininity, Humanity と比較し考察を行なうこととする。加えて、性別によって、再分類された性役割意識得点に差がみられるのかを検討する。また、基準関連妥当性の確認のため、女性性及び男性性の中核とされる共同性と作動性を測定するジェンダー・パーソナリティ尺度 CAS との関連を確認する。

## 方法

**参加者** 大学生および大学院生 68 名（男性 37 名，女性 31 名）を対象として，2017 年 10 月に調査を行なった。

**質問項目** (1) 基準関連妥当性検討のために，共同性・作動性尺度（CAS：土肥・廣川，2004）から肯定的共同性 6 項目，肯定的作動性 6 項目の計 12 項目について，4 件法（1：全く当てはまらない，2：あまり当てはまらない，3：やや当てはまる，4：かなり当てはまる）で回答を求めた。(2) ジェンダー・パーソナリティを測定するために，M-H-F scale（伊藤，1978）の 30 項目（Masculinity 10 項目，Humanity 10 項目，Femininity 10 項目）について，7 件法（0：全く当てはまらない，1：あまり当てはまらない，2：やや当てはまらない，3：どちらともいえない，4：やや当てはまる，5：かなり当てはまる，6：非常に当てはまる）で回答を求めた。なお，教示については，伊藤（1978）の自己にとっての重要性を聞く「あなたにとって次のような性質はどの程度重要だと思いますか」から，「この尺度はあなたが自分自身をどんな人間だと思っているか，そのイメージをとらえるためのものです。あなたにとって次のような形容詞はどの程度あてはまりますか？」に変更し，できる限り社会一般にとっての重要性認知が影響しないようにした。(3) 性役割特性語についての重要性認知を測定するために，M-H-F scale（伊藤，1978）の 30 項目について，「次のような性質を備えることは，一般的に女性と男性のどちらにとってより重要だと思いますか？」との教示の後，両極タイプの 7 件法（0：女性にとって非常に重要，1：女性にとってかなり重要，2：女性にとってやや重要，3：どちらともいえない，4：男性にとってやや重要，5：男性にとってかなり重要，6：男性にとって非常に重要）で回答を求めた。

## 結果と考察

### 性役割特性語認知における因子分析

M-H-F scale（伊藤，1978）を用いて性役割特性語についての重要性認知を測定した 30 項目について，R 3.4.1 で最尤法プロマックス回転による因子分析を行なった。伊藤（1978）では，Masculinity，Humanity，Femininity の 3 因子から構成されているため，本研究においても，3 因子に固定し，各因子を構成する性役割特性語に着目することとした。因子負荷量が .40 未満，または複数因子において .40 以上の因子負荷量がみられた 5 項目は除外した因子分析の結果を Table 1 に示した。

3 因子それぞれについて Cronbach の  $\alpha$  係数を算出したところ，Table 1 に示したとおり，どの因子においても .75 以上の値が確認され，内的整合性を備えていると判断された。そこで，各因子の特徴を明らかにするため，性役割特性語についての重要性認知における平均値を算出し，R 3.4.1 上で anovakun 4.8.0 を用いて 1 要因分散分析を行なった。重要性認知は，得点が低いほど，女性にとって非常に重要な性質であると捉えられており，得点が高いほど，男性にとって非常に重要な性質であると捉えられていることを示す。分散分析の結果，各因子の性役割特性語についての重要性認知得点において有意差がみられた ( $F(2, 67) = 59.00, p < .001, \eta^2 = .40$ )。多重比較を行なったところ，第 1 因子と第 2 因子の間 ( $t(67) = 8.45, p < .001$ ) 及び第 1 因子と第 2 因子の間 ( $t(67) = 9.85, p < .001$ ) に有意な差がみられた。Table 2 からわかるように，第 1 因子は他の因子に比べ有意に得点が高く，男性にとって重要な性質であると捉えられていると考えられる。したがって，第 1 因子は Masculinity に相当する因子であるといえる。しかしながら，第 2 因子と第 3 因子の間には差がみられず，Femininity と Humanity を明確に分けることが困難であった。

以上を踏まえ，因子数を 2 に固定し，再度，最尤法プロマックス回転による因子分析を行なうこととした。因子負荷量が .40 未満，または複数因子において .40 以上の因子負荷量がみられた 5 項目は除外した結果を Table 3 に示した。

2 因子それぞれについて Cronbach の  $\alpha$  係数を算出したところ，Table 3 に示したとおり，どちらの因子においても .82 以上の値が確認され，内的整合性を備えていると判断された。各因子の特徴を明らかにするため，性役割特性語についての重要性認知における平均値を算出し， $t$  検定を行なった。その結果，第 1 因子と第 2 因子の重要性認知得点に有意差がみられた ( $t(67) = 6.01, p < .001, d = .73$ )。Table 4 からわかるように，第 1 因子は第 2 因子に比べ有意に得点が高いため，第 2 因子よりも男性にとって重要な性質であると捉えられている。したがって，第 1 因子は Masculinity に相当する因子，第 2

因子は Femininity に相当する因子であると考えられる。これを踏まえ、第 1 因子を男性役割因子、第 2 因子を女性役割因子とし、第 1 因子に含まれる項目を男性役割測定項目、第 2 因子に含まれる項目を女性役割測定項目とした。

Table 1 性役割特性語の重要性認知における因子分析3因子解

	Factor1	Factor2	Factor3	共通性
<b>Factor 1 (<math>\alpha=.88</math>)</b>				
20. 意志の強い	<b>.74</b>	.02	.12	.52
14. 信念をもった	<b>.73</b>	.09	.37	.54
9. 頼りがいのある	<b>.73</b>	-.04	-.12	.58
29. 決断力のある	<b>.72</b>	-.05	.03	.51
6. 愛嬌のある	<b>-.70</b>	.13	.13	.54
27. かわいい	<b>-.64</b>	.09	.14	.46
10. 自分の生き方のある	<b>.62</b>	-.03	.13	.36
18. 言葉使いのていねいな	<b>-.61</b>	.11	.02	.38
15. 色気のある	<b>-.61</b>	.11	-.08	.35
17. たくましい	<b>.56</b>	-.03	.05	.30
21. おしゃれな	<b>-.53</b>	.04	-.09	.26
1. 冒険心に富んだ	<b>.47</b>	-.12	.04	.22
<b>Factor 2 (<math>\alpha=.76</math>)</b>				
22. 頭の良い	.11	<b>-.77</b>	-.08	.57
28. 率直な	-.03	<b>.69</b>	.02	.46
30. 従順な	-.04	<b>.64</b>	.14	.38
8. 献身的な	-.36	<b>.59</b>	.22	.45
7. 暖かい	-.11	<b>.56</b>	.21	.30
25. 視野の広い	.16	<b>-.49</b>	-.01	.25
4. 心の広い	-.11	<b>.45</b>	.02	.20
19. 誠実な	.23	<b>.42</b>	-.38	.52
<b>Factor 3 (<math>\alpha=.75</math>)</b>				
26. 行動力のある	-.04	-.32	<b>-.92</b>	.77
16. 明るい	.26	.30	<b>.73</b>	.49
13. 健康な	-.22	-.17	<b>-.71</b>	.44
3. 静かな	-.12	-.20	<b>.48</b>	.37
12. 繊細な	-.18	-.24	<b>.44</b>	.39
24. 優雅な	-.34	-.34	.30	.45
11. 指導力のある	.08	.34	-.26	.25
5. 大胆な	.15	.32	-.30	.30
2. 忍耐強い	.28	.06	.39	.17
23. 自己主張のできる	.11	.30	-.33	.29
因子間相関	Factor 1			
	Factor 2	.10		
	Factor 3	-.25	-.27	

Table 2 3因子解での重要性認知得点の平均値とSD

	Factor 1	Factor 2	Factor 3
n	68	68	68
Mean	3.88	2.85	2.66
SD	.67	.63	.68

Table 3 性役割特性語の重要性認知における因子分析2因子解

	Factor1	Factor2	共通性
<b>Factor 1 (<math>\alpha=.88</math>)</b>			
9. 頼りがいのある	.75	.14	.59
6. 愛嬌のある	-.74	-.06	.55
29. 決断力のある	.69	.03	.48
20. 意志の強い	.67	.05	.46
27. かわいい	-.66	-.08	.45
18. 言葉使いのていねいな	-.62	.01	.38
15. 色気のある	-.60	.03	.36
14. 信念をもった	.59	-.06	.35
10. 自分の生き方のある	.56	-.05	.31
17. たくましい	.55	.06	.30
21. おしゃれな	-.49	.01	.24
8. 献身的な	-.47	.35	.34
1. 冒険心に富んだ	.47	-.06	.22
<b>Factor 2 (<math>\alpha=.82</math>)</b>			
22. 頭の良い	.21	-.62	.43
28. 率直な	-.10	.62	.39
19. 誠実な	.27	.61	.45
24. 優雅な	-.38	-.59	.50
5. 大胆な	.21	.54	.34
12. 繊細な	-.27	-.51	.34
30. 従順な	-.14	.51	.28
23. 自己主張のできる	.16	.51	.29
11. 指導力のある	.10	.47	.23
3. 静かな	-.22	-.47	.27
25. 視野の広い	.20	-.46	.25
4. 心の広い	-.15	.42	.19
26. 行動力のある	.22	.20	.09
2. 忍耐強い	.18	-.10	.04
7. 暖かい	-.22	.37	.18
13. 健康な	-.02	.20	.04
16. 明るい	.03	-.11	.01
因子間相関	Factor2	.02	

### 基準関連妥当性の検討

性役割特性語が自己にとってどの程度あてはまるかを尋ねた質問項目の男性役割測定項目と女性役割測定項目から、男性役割因子得点と女性役割因子得点を算出した。各得点の平均と標準偏差は Table 5 に示した通りである。なお、大幅に欠損のあった7名（男性2名、女性5名）を以後の分析では除外した。

基準関連妥当性を検討するために、これらの得点とジェンダー・パーソナリティ尺度 CAS の肯定的共同性得点および肯定的作動性得点との相関（ピアソンの積率相関係数）を求めた。男性役割因子得点は、肯定的共同性得点 ( $r=.60, p<.001$ ) 及び肯定的作動性得点 ( $r=.71, p<.001$ ) と正の相関を示した。男性役割因子得点では、男性性の中核となる肯定的作動性得点との相関係数の方が、肯定的共同性得点との相関係数よりも大きくなっているが、2つの相関係数に有意な差はみられなかった。また、女性役割因子得点は、肯定的共同性得点 ( $r=.63, p<.001$ ) 及び肯定的作動性得点 ( $r=.52, p<.001$ ) と正の相関を示した。女性役割因子得点では、女性性の中核となる肯定的共同性得点との相関係数の方が、肯定的作動性得点との相関係数よりも大きくなっているが、2つの相関係数に有意な差はみられなかった。これらのことから、男性役割因子も女性役割因子もおおむね妥当な因子となっていると思われる。

なお、肯定的共同性得点と肯定的作動性得点の間 ( $r=.26, p<.05$ ) 及び男性役割因子と女性役割因子の間 ( $r=.81, p<.001$ ) にも正の相関がみられた。

### 性別×役割因子の分散分析

性別によって、役割因子得点に差がみられるのかを検討するため、性別（男性、女性）×役割因子（男性役割、女性役割）の2要因分散分析を行なった。仮説として、男性は女性よりも、男性にとって重要であると認知している男性役割因子得点が高く、女性は男性よりも、女性にとって重要であると認知している女性役割因子得点が高いと予測した。

R 3.4.1 上の anovakun 4.8.0 を用いて2要因分散分析を行なった結果、役割因子の主効果が有意であった ( $F(1, 59) = 10.08, p < .01, \eta^2 = .02$ )。Table 5 及び Figure 1 からわかるように、女性役割因子得点の方が男性役割因子得点よりも有意に得点が高かった。しかし、性別の主効果や交互作用については有意でなかった。

伊藤（1978）では、個人的評価の場合、男性も女性も男性役割を女性役割より高く評価することが明らかにされており、後藤・廣岡（2003）においても、個人的評価では男女ともに Humanity, Masculinity, Femininity の順に高く評価していることが示されていた。しかし、本研究においては反対に女性役割因子のほうが高い得点となっていた。これは、先行研究においては個人的評価として各役割特性語の重要性を尋ねていたのに対し、本研究では自己にどの程度あてはまるかを尋ねていたことによる影響も考えられる。しかしながら、社会情勢の変化に伴い性別意識の在り方が変化してきているために生じた可能性も考えられるので、男性役割因子および女性役割因子を構成する性別特性語について、先行研究と比較しつつ考察する必要があるだろう。

Table 4 2因子解での重要性認知得点の平均値と SD

	Factor 1	Factor 2
n	68	68
Mean	3.87	3.27
SD	.66	.58

Table 5 各得点の平均値と SD

	共同性	作動性	男性役割因子	女性役割因子
n	61	61	61	61
Mean	3.19	2.73	2.98	3.22
SD	.43	.52	.95	.87

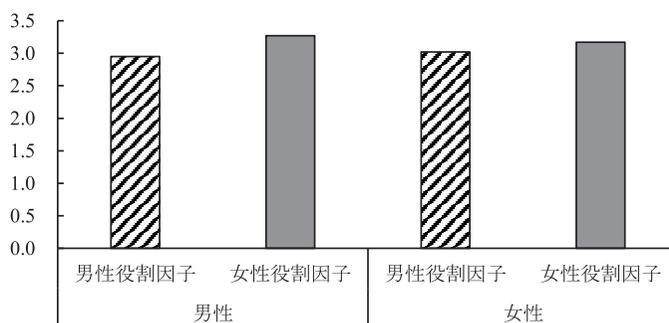


Figure 1 各因子得点の平均値

### 性別特性語の分類における変化

本研究における性別特性語の分類と、伊藤（1978）および後藤・廣岡（2003）における性別特性語の分類を整理し、どのような移動がみられたのかを考察する。Table 6 に先行研究での結果も含めた性別特性語の分類を示した。本研究では、伊藤（1978）や後藤・廣岡（2003）の調査方法と異なり、両極タイプの7件法によって、男性にとって重要か、女性にとって重要かを尋ね、因子分析を行なったため、各因子において逆転項目が存在する。したがって「かわいい」や「色気のある」など、先行研究では女性役割特性語に入っていたものが、本研究では逆転項目として男性役割特性語にいくつか分類されている。男性役割特性語に分類されている逆転項目は、伊藤（1978）において女性役割特性語として扱われており、男性役割と女性役割を相補的な関係だと捉えると、おおむね男性役割として重要であると認知されている性別特性語は変化

していないと考えられる。これに対して、伊藤（1978）や後藤・廣岡（2003）では女性役割特性語であった「優雅な」や「繊細な」などの性別役割特性語が、本研究では逆転項目として、女性役割特性語に分類されている。また、「自己主張のできる」や「指導力のある」といった男性役割特性語に分類されていた項目が、女性役割特性語に移動していた。このことから、女性役割として重要であると認知されている性別役割特性語は約 40 年前、約 15 年前から大きく変化してきていることがわかる。女性の社会進出が進むとともに、男女共同参画社会に向けた意識改革が進んだことで、女性に求められている特性に、従来の男性性や人間性とされていた特性が取り込まれてきている可能性が示唆される。

これらを踏まえると、結果において女性役割因子得点のほうが男性役割因子得点よりも、有意に得点が高かった理由として、女性役割が男性役割に接近していることがあげられるだろう。しかしながら、この理由だけでは、男性役割因子得点が女性役割因子得点よりも得点が低かった説明には不十分であると思われる。性別の主効果や交互作用が有意でなく、男性においても女性と同様に、男性役割因子得点が女性役割因子得点よりも得点が低かった理由についても考察する必要があるだろう。この点に関して、渡邊（2017）による、男性は特に女性を気遣い、従来女性役割とされてきた家庭役割を担おうとする意識が高まっているという指摘が手掛かりになる。男性は、女性役割特性語について、一般的には女性にとって重要であると認知しつつも、自己についての視点に切り替えたとき、女性役割についても柔軟に受容するように変化してきたのではないだろうか。後藤・廣岡（2003）において、社会的評価と男性役割期待とのズレが生じ始め、これまでのように男性役割期待を身につければ自動的に社会的に望ましい性質も身につくというわけにはいなくなってきていると述べられているように、男性の家事育児への参加が望まれる社会情勢にあつて、従来の男性性を身につけるだけでなく、女性役割も併せ持つ必要が生じているといえる。

Table 6 各性別役割特性語の男性役割と女性役割への分類

	伊藤（1978）	後藤・廣岡（2003）	本研究（2017）
男性役割特性語	頼りがいのある	頼りがいのある	頼りがいのある
	決断力のある	決断力のある	決断力のある
	意志の強い	意志の強い	意志の強い
	信念をもった	信念をもった	信念をもった
	たくましい	たくましい	たくましい
	冒険心に富んだ	冒険心に富んだ	冒険心に富んだ
	大胆な	大胆な	自分の生き方のある
	行動力のある	行動力のある	かわいい_R
	指導力のある		言葉使いのていねいな_R
	自己主張のできる		色気のある_R
			愛嬌のある_R
			おしゃれな_R
			献身的な_R
女性役割特性語	優雅な	優雅な	優雅な_R
	繊細な	繊細な	繊細な_R
	従順な	従順な	従順な
	静かな	静かな	静かな_R
	かわいい	かわいい	率直な
	色気のある	色気のある	頭の良い_R
	愛嬌のある	愛嬌のある	誠実な
	おしゃれな	おしゃれな	大胆な
	献身的な	献身的な	自己主張のできる
	言葉使いのていねいな	率直な	指導力のある
		明るい	視野の広い_R
		暖かい	心の広い

以上より、女性役割が男性役割を取り込み接近してきている一方で、男性役割は女性役割を取り込み接近してきていることが示唆された。言い換えれば、自己のもつ特性についての評価を調査する際、ジェンダー・パーソナリティとして明確に男性役割と女性役割を分けて評価することが難しくなっているといえる。他方で、一般的に男性にとって重要であるという認知と一般的に女性にとって重要であるという認知との間には有意差がみられたため、一般的な男性に期待する役割や一般的な女性に期待する役割については、明確なイメージが存在していることが明らかとなった。しかしながら、女性役割に関しては従来の女性役割期待と異なる、男性性や人間性が一部取り込まれた新たな女性役割が形成されつつあることが示された。したがって、今後は特に女性についての性役割期待に焦点をあてた検討を行なっていく必要があるだろう。

## 謝辞

本論文作成にあたり、調査にご協力頂きました大学生および大学院生の皆様に感謝申し上げます。

## 引用文献

- Bem, S. L. (1974). The measurement of psychological androgyny. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, 42, 155-162.
- Bem, S. L. (1976). Probing the promise of androgyny. In A. G. Kaplan & J. P. Bean (Eds.), *Beyond sex-role stereotypes: Readings toward a Psychology of androgyny*. Boston: Little, Brown. 48-62.
- 土肥伊都子・廣川空美 (2004). 共同性・作動性尺度 (CAS) の作成と構成概念妥当性の検討—ジェンダー・パーソナリティの肯否両側面の測定— 心理学研究, 75, 420-427.
- 後藤淳子・廣岡秀一 (2003). 大学生における性役割特性語認知と性役割態度の変化 三重大学教育学部研究紀要 教育科学, 54, 145-158.
- 伊藤裕子 (1978). 性役割の評価に関する研究 教育心理学研究, 26, 1-11.
- 柏木恵子 (1967). 青年期における性役割の認知 教育心理学研究, 15, 193-202.
- 渡邊寛 (2017). 新しい男性役割尺度の開発と信頼性・妥当性の検討 心理学研究, 88, 251-259.